

## ノヴゴロドのギリシャ人絵師

—オリセイ・グレチンの屋敷の発掘によせて—

松 木 栄 三

### I

ノヴゴロド第一年代記の12世紀末から13世紀30年代初めまでの記述に、グリチン Грьчин ないしグレチン Гречин の名で呼ばれていたノヴゴロドの聖職者が数度にわたって言及される。1193年と1229年の2回、彼は大主教というノヴゴロド最高位の僧職の候補者として推されているが、2度とも「くじ」運に恵まれず別の候補者に先を越された<sup>(1)</sup>。しかし1226年、ユリエフ修道院の修道院長に就任することでグレチンはノヴゴロド聖界第2の地位を手に入れる<sup>(2)</sup>。ところが今度は1231年、運わるく何らかの政変にからんで院長の職を追われ、同時に幽閉されて病気になる、そのまま6週間後に死亡している<sup>(3)</sup>。ノヴゴロド聖界におけるグレチンの経歴について年代記の伝える主な点は以上でついているのだが、第一年代記シノド本の1196年の記事にはもう1回、グレチン・ペトロヴィチ Грьчин Петрович なる絵師がプレスチェンスキー門の聖母教会の壁画を描いたという叙述がある<sup>(4)</sup>。だが年代記の記録だけを見る限り、この絵師グレチンが大主教の候補に推されたりユリエフの院長になったりした聖界有力者たるグレチンと同一人物であるかどうか直ちに判断はできない。イコンや教会壁画を描く正教世界の絵師の多くが聖職者であったことはよく知られているもの<sup>(5)</sup>、この時代ノヴゴロドに在住した聖職者の「グレチン」が一人だけかどうかは明らかではない

---

(1) НПЛ, стр.231-232, 68, 274-275. 1156年以來ノヴゴロド主教は民会が選出しキエフ府主教はそれを自動的に叙する関係が成立した。民会が候補者をめぐって対立すると聖ソフィアの祭壇でくじを引いて決する習慣ができ上る。См. И.Д.Беляев, Рассказы из русской истории. кн.2, История Новгорода Великого, М., стр.119-122; А.С.Хорошев, Церковь в социально-политической системе Новгородской феодальной республики, М., 1980, стр.35-48.

(2) НПЛ, стр.65, 269. ユリエフ修道院長はこの頃から掌院(архимандрит)の称号を得てノヴゴロドの全修道院の上に立つとともに、民会で選出される国家的な職務の一つとなった。В.Л.Янин, Из истории высших государственных должностей в Новгороде, в кн.: Очерки комплексного источниковедения. М., 1977, стр.141-148.

(3) НПЛ, стр.70, 274-275.

(4) НПЛ, стр.42. 「同年、大主教マルトゥリイは〔プレスチェンスキー〕門の聖母教会を絵で飾った。絵師はグリチン・ペトロヴィチである」

からである。

Гречин とはもともと Грек と同じく「ギリシャ人」を意味する語であるから、年代記に言及される上記の何ヶ所かのグレチンが単にギリシャ人というエトノスを指示しているのか、それともギリシャ人だったりギリシャ人の子であるという出自を渾名にした呼称ないし俗称であったのかは必ずしも判然としない。事実、ニキツキーなどはその『ノヴゴロド教会史』の中で、ノヴゴロドの聖界では13世紀前半になってもなおギリシャ人聖職者に対する尊敬は衰えておらず、聖界の最重要ポストにギリシャ人を推す「党派」が存在したとして「グレチン」が言及される上記の一連の箇所を引証している<sup>(6)</sup>。つまりニキツキーは Гречин の語を特定人物の呼称ではなく、エトノスの意味にとっているのである。だが一世代ほどの短期間に大主教やユリエフ修道院の院長になるような有力なギリシャ人聖職者が何人も集中してあらわれたとは考えにくい<sup>(7)</sup>。また年代記の記述によると1193年に民会で推された大主教候補者は「マルトウリィ」「ミトロファン」「グレチン」の3人、1229年には「スピリドン」「オサフ」「グレチン」の3人でいずれの場合もグレチン以外の人物は洗礼名で表示されている。グレチンだけが《或るギリシャ人》といった曖昧な表現のされ方をしているのは不自然だとすれば、「グレチン」は当時のノヴゴロド市民がよく知っていたある特定のギリシャ系の人物の呼び名だったと考えるのが妥当である。とはいえ「グレチン」がエトノスとしての「ギリシャ人」を意味することもある以上<sup>(8)</sup>、絵師グレチン・ペトロヴィチと聖界有力者グレチンとが同一人物だと断言するにはやはり若干のためらいが残る。いずれにせよ、年代記からはこれ以上の情報を引きだすことは期待できない。

ところがノヴゴロドの考古学調査隊は、1973年に開始した発掘で「グレチン」という呼び名の、絵師と同時に聖職者でもある人物の屋敷を掘りあてた。この人物にあてた手紙が発見され「オリセイ・グレチン」と書かれていたから、洗礼名がオリセイで、グレチンは俗称であることがはっきりした。地層の年代は12世紀の80年代から13世紀初頭までのもので、年代記にグレチンの名が集中的に言及される年代の前半部分に符合している。場所はクレムリの南側の城門スパスカヤ門から200メートルほど南に下ったところ、中世の市民居住領域を構成する五区区分でいうとリュージン区の中である<sup>(9)</sup>。

トポグラフィー研究で復元されている中世リュージン区市街図の輪郭は、スパスカヤ門から市の外壁にむかって南北に走るプロボイナヤ通りと、この長い大通りに交叉しつつ東西に

(5) 特に初期にはイコンのほとんどは修道院内で製作されたとされている。しかしノヴゴロドでは16世紀には多くの俗人のイコン絵師（иконники）も認められる。16世紀80年代の台帳資料では合計41人のイコン絵師が数えられるが、店舗台帳資料だけみれば限り約半数がさまざまな地位の聖職者で残りが俗人である。С. В. Вахрушин (ред.), Лавочные книги Новгорода Великого 1583 г., М., 1930, стр. 7, 8, 13, 14.

(6) А. И. Никитский, Очерки внутренней истории церкви в Великом Новгороде, СПб., 1879, стр. 32.

(7) ノヴゴロド第一年代記に言及される「グレチン」はすべて1193-1231年の間だけに集中していて他の時期にはみられない。

(8) 1228年の記述にブスコフからノヴゴロドに一人のギリシャ人の使者が派遣されたとあり、ここでギリシャ人を Гръцин と記している。НПЛ, стр. 66, 271.

平行する何本もの通りによって形づくられていた<sup>(10)</sup>。街路はいずれも道巾3～4メートルほどの松材で舗装されている。東西に平行して走る通りのうちクレムリのすぐ南側を通るダブルイナヤ通りから南方向に数えて4本目、チェルニツィナ（尼僧）通りがプロボイナヤ通りと交叉する四つ辻の南東の角にこの「グレチン」の屋敷は発見された<sup>(11)</sup>。屋敷地は東西27メートル南北26メートルの四角形で丸太の杭をすき間なく並べた柵で周囲をかこみ、門はプロボイナヤ通りの側についている。屋敷地の内部をみると、東及び南側の柵に沿って大小五つの木造建物がカギ形にならび、交叉する2つの通りにかこわれた北西の角地は前庭になっていて建物が無い。門を入ると主たる建物の前まで通りと同じようなやや巾の狭い舗装がほどこされている。12世紀80年代から13世紀初め（1209年）の大火事のときまで、この屋敷地に少なくとも1人の絵師が住み、ここに工房をおいてイコン製作にたずさわっていたことを示す多数の遺物が出土した<sup>(12)</sup>。絵師がまた聖職者であることや、彼の通称が例の「グレチン」であることを示す白樺文書もいくつか発見された。彼が聖職者ないし絵師としてかなり高い社会的役割を果たしていたことも判明した。こうしてどうやら年代記中の絵師グレチンと大主教候補者グレチンとが同じ屋敷地のなかで重なりあった。リュージン区の尼僧通りの一隅で、ノヴゴロド年代記にちよっぴり顔を出すギリシャ系の、今まであまりとりあげられることもなかった一人の人物に出会うことになったわけである<sup>(13)</sup>。

グレチンの屋敷地の発見は、1973年に始まり現在もなお進行中のトロイツキー発掘の一部をなしている。この発掘はプロボイナヤ通りと尼僧通りの交叉点及びその周辺の合計5つの屋敷地を含み、大量の出土品と木製構造物をよく残す10世紀から15世紀までの保存度の良い文化層を含んでいる。尼僧通りの木製舗装は10世紀から15世紀までの間に27層もつみ重ねられているし、屋敷地跡にも各時代の木造建築の土台丸太や遺構が何層にも重なって出土する。当然、グレチンの屋敷地にも10～12世紀の彼以前の住人たちの生活の前史があり、13世紀前

(9) グレチンの屋敷地を含むトロイツキー発掘の全体について詳しくは以下を参照されたい。Археологические открытия 1973 г., М., 1974, стр.35-38.(以下 AO 1973 г.と略記); AO 1974 г., М., 1975, стр. 44-47; AO 1975 г., М., 1976, стр.48-51; AO 1976 г., М., 1977, стр.36-38; AO 1977 г., М., 1978, стр.42-45; AO 1978 г., М., 1979, стр.45-47; AO 1979 г., М., 1980, стр.39-42; AO 1980 г., М., 1981, стр.37-39; AO 1981 г., М., 1983, стр.43-46; AO 1982 г., М., 1984, стр.37-40.

(10) 中世ノヴゴロドのトポグラフィーに関してはオルロフの著作とその付図を参照。С.Н.Орлов, К топографии Новгорода 10-16 вв., в кн.: Новгород, К 1100 летию города, М., 1964, стр.264-285.

(11) リュージン区と発見されたグレチンの屋敷地近辺のトポグラフィーについて詳しくは注(14)の書物の5-31ページを見よ。チェルニツィナ通りの名称はグレチンの屋敷から200メートルほど西の同じ通りにあった聖ヴァルヴァラ尼僧院に由来する。

(12) グレチンの屋敷の建物の配置と構造、さまざまな生活上の出土品についての分析は注(14)の書物59-113ページ、この屋敷地の12世紀後半から13世紀初めまでの地層の編年については32-42ページ、イコン製作に関連する多様な発掘物については114-135ページに詳しい。

(13) 1973-77年の発掘資料として記録史料との総合的検討を含め、絵師グレチンの屋敷と工房についての要領のよい紹介としては次のものがある。В.Л.Янин, Открытие художественной мастерской 12 в. в Новгороде, ВАИ СССР, 1980, №1, стр.112-121.

半以後の後史もある。しかし彼は遠い国からやってきた異邦人だったからであろうか、彼のイコン絵師または聖職者としての生活史を物語る出土品は12世紀後半から13世紀はじめだけに集中し、グレチン以前の住人とも以後の住人ともほとんど連続性をもっていない。彼は80年代前後にここにやってきて住み、1209年の大火ですべて焼失したあとプツリと消息を断っている。その後、焼跡に再建された家にすんだのはもはや僧職とも絵師とも無縁な人々であった。1209年以後のグレチンの足跡については、後でまた乏しい年代記の情報にたちもどってみるしかない。それゆえグレチンが尼僧通りに生活した20—30年の期間だけ、この屋敷地を前後の歴史からきり離して研究することもそれほど無理なことではない。

実際、モスクワ大学の発掘担当者たちは、現在なお進行中のトロイツキー発掘のうち1973—77年に調査したグレチンの屋敷地（それも彼が生活した年代）だけについての研究を1冊にまとめて1981年に出版した<sup>(14)</sup>。この本に1977年以後に行われた発掘調査の補足的報告等を加えれば、グレチンの屋敷地の考古学的研究から得られる情報はほゞ網羅される<sup>(15)</sup>。尼僧通りから掘りだされた考古学的情報は年代記の「グレチン」像にどの程度の肉づけを可能にし、またどんな新たな問題を提起するのであろうか。

## II

尼僧通りのグレチンがイコン製作にたずさわる専門の絵師だったことを示す最も端的な証拠は、彼がこの屋敷地で受けとったイコン製作に関する「注文」の手紙である。彼の屋敷の12世紀後半から13世紀初めまでの地層から合計31枚の白樺文書が出土した<sup>(16)</sup>。そのほとんどはロシア人の洗礼名（聖者名）を羅列しただけの今までに例のないタイプの文書（後述）であるが、グレチンにあてた手紙も3通だけ発見された<sup>(17)</sup>。3通のうち2通は教会の司祭から送られてきたイコン製作の依頼状ないし督促状である。

「拝啓、司祭よりグレチンへ（Покланяние от попа к Гръциноу）。私に六翼の天使2人を2つのイコンにかいて下さい。デイスの上の列のものです。あなたに接吻を。報酬は神の思召しによりますが、すべての条件を申しでて下さい<sup>(18)</sup>」（№ 549. 1196—

(14) Б.А.Колчин, А.С.Хорошев, В.Л.Янин, Усадьба новгородского художника 12 в., М., 1981. 執筆分担は明らかにしていないが以下のような内容の章だてになっている。「トロイツキー発掘のトポグラフィー」(С. 5-31)「トロイツキー発掘の編年」(С. 32-42), 「12世紀後半—13世紀初めにおける屋敷地Аの帰属」(С. 43-58), 「屋敷地Аの建物, 経済及び生活」(С. 59-113), 「屋敷地Аの画家工房」(С. 114-135), 「絵師オリセイ・ペトロヴィチ・グレチン」(С. 136-155), 「オリセイ・グレチンのフレスコ画?」(С. 156-166). (以下 Б.А.Колчин и др., Усадьбаと略記)

(15) 1973—77年の発掘ではグレチンの屋敷地の西半分が未発掘であったが、この部分は1981—82年にすべて発掘された。この部分を含むグレチン屋敷の全出土物の全体研究はまだできていないが、81—82年発掘の成果の概要は АО 1981 г., М., 1983, стр. 43-46; АО 1982 г., М., 1984, стр. 37-40. で把握できる。

(16) トロイツキー発掘で出土した白樺文書は1982年まで合計73枚、うちグレチンが住んでいた時代の彼の屋敷地から出たのは31枚である。В.Л.Янин, Е.А.Рыбина, Открытие древнего Новгорода, в кн.: Путешествия в древность, М., 1983, стр. 172.

1209年)<sup>(19)</sup>。どこかの司祭が自分の教会に飾るイコン2枚をグレチンに注文した手紙である。「六翼の天使」とは9位階に分れる天使の最上級に位置するセラフィムのことである<sup>(20)</sup>。「キリスト」「聖母」「洗礼者ヨハネ」の3つのイコンの組合せである「デイス」の上に配列されるはずのものだと指示しているのだから<sup>(21)</sup>、これは明らかに教会のイコノスタシスを飾る大型のイコンである。もう1通はもっと短い。「司祭ミナよりグレチンへ(От попа от Минь ко Грициноу)。ペテロの日までに3枚のイコンを持ってこちらに来て下さい」(№558. 1196-1209年)<sup>(22)</sup>。今度のはすでに以前に注文済みのイコン3枚を聖ペテロの祭日(6月29日)までに届けてくれるように催促する内容である。注文主ミナは司祭なのだからやはりグレチンが依頼されたのは教会用のイコンであろう。両方とも手紙で注文や督促をしている点からみて、これらの司祭はノヴゴロド市から多少とも離れた場所の教会の僧侶だと推定される。これら2枚の白樺文書で注目すべきことは、グレチンがイコノスタシスや教会内の壁を飾るような本格的イコンを注文生産する専門の絵師だった点である。

ビザンツから伝わった教会美術のジャンルのうちロシアで最も発達したのはイコンであり、ギリシャ正教世界でロシアほどイコン製作が盛んだったところはないと言われている<sup>(23)</sup>。美

(17) №502 (1196-1209年), №549 (1196-1009年), №558 (1196-1209年)いずれも12世紀末から13世紀初めにかけての第13層(尼僧通りの木製舗装の重なりのうち上から13番目のもの)に平行する地層から出土した。№502のみは白樺文書集の第7巻(Новгородские грамоты на бересте, 1962-1976 гг., М., 1978, стр.96-99.)で刊行されているが、№549, №558は未刊行なので注(14)の書物から引用する。なお手紙のほかにはグレチンの名を記した白樺文書としてはたった一語彼の名前 *грицьнь* を書き記した荷札らしい文書も発見されている(№546, 1196-1209年)。人名を主格又は与格形で白樺樹皮に書き荷札に使ったと考えられる例はこれまでも7件ほど発見されている(№58, 79, 319, 323, 458, 498, 499)

(18) 手紙の後半ではイコンの代価が問題にされ報酬(мзда)という言葉が使われている点が注目される。イコン製作は本来神のための神聖な仕事でありイコンを売買することは罪とみなされたから、貨幣とひきかえに交換する *променивать* (=売る)とか貨幣と交換で得る *выменивать* (=買う)とかの語が使われた。16世紀ソフィア聖堂の支出台帳には市場でのイコンの購入が再三記録され、絵師某々よりこれこれの聖像を *выменить* したと記載されている。С.В.Бахрушин, Научные труды, т.1, М., 1952, стр.104-105; Б.Д.Греков, Избранные труды, т.3, М., 1960, стр.82-83.

(19) Б.А.Колчин и др., Усадьба, стр.141.

(20) 天使は天上の教会制度を表わして3段階9隊に分れ、熾天使(セラフィム)、智天使(ケルビム)、座天使、主天使、力天使、能天使、権天使、大天使(アルハンゲル)、天使(アンゲル)の順となる。イコンに最もよく登場するのは大天使ミハイルとガヴリエルであるが、最上級の六翼の天使セラフィムや第二位の地位にあるケルビムもときに描かれている。セラフィムはノヴゴロド・イコンで見ると限りでは、六枚の翼を上下左右に広げその中心部分に人の顔だけが見える余り魅惑的とはいえない姿でえがかれている。神の王座に任える天使とされるのでキリスト像の上部などに配列されることが多い。美術史家レザノフが「グレチン」の作品の一つに比定する有名な12世紀ノヴゴロドの両面イコン「十字架崇拜」(片面は聖顔布のイコン)では、十字架の上部左右に二人の6翼天使と二人の4翼天使(ケルビムか?)が描かれ、十字架の左右には2翼の大天使ミハイルとガヴリエルがぬかづいている。クルト・ブラッシュ『イコン』(三彩社)38-39頁 В.Н.Лазарев, Новгородская иконопись, М., 1976, стр.11-12, таблица 9.

(21) デイス(деисус)はギリシャ語のデエシス(Deesis)つまり「祈願」を意味する言葉であるが、図像学では左に洗礼者ヨハネ、右に聖母マリアを配したキリストの図像を意味しており、東方諸教会で一般に最も重視されたイコンである。イコノスタシスもこの三体聖像を中心にさまざまな種類のイコンが上下左右に配置されながら発掘していったとされる。浜田靖子『イコンの世界』(美術出版社) p.61-72 参照。

(22) Б.А.Колчин и др., Усадьба, стр.143.

術史家ヴズドルノフによれば、その最も根本的な原因は中世ロシアの教会が圧倒的に木造建築であり、教会の壁を飾るのに壁画を用いることができなかったからである。「残された方法は壁をイコンで飾ること、それも、壁の全部ではなく最も大切な部分だけでもせよ、壁画の代役がつとまるほどの沢山のイコンで飾ることであった。このためにロシアのイコンは数も多く、主題も多様なのである。イコンが古代ルーシ美術史に占める重要な地位は、ちょうどビザンツ美術史でのモザイク、南スラヴ美術史でのフレスコ画に匹敵する」<sup>(24)</sup>。たしかにノヴゴロドではキエフ、ウラジミル、モスクワなどとならんで石造教会がかなり建設されたし、したがって教会の壁がフレスコ画で飾られる例も少なくなかった<sup>(25)</sup>。グレチンが活躍した12世紀末について年代記の記事をひろってみると、1189年にはアルカージ修道院の受胎告知教会、1199年にはゴロジシチェの聖変貌教会とスタラヤルーサの聖救世主教会の壁画がかかれ、1196年には例の「グレチン・ペトロヴィチ」がクレムリの城門の教会をフレスコ画で飾っている<sup>(26)</sup>。尼僧通りのグレチンが1196年の絵師グレチン・ペトロヴィチと同一人物である可能性は非常に強いから、われらがグレチン（2人が重なればオリセイ・ペトロヴィチ・グレチンが彼のフルネームになろう）がイコンだけでなく壁画もかいたことは確実であろう。ヤニンは、12世紀ノヴゴロドの最も壮大な壁画である聖変貌教会の<sup>(27)</sup>フレスコ画がグレチンを指導者に、当時のノヴゴロドの絵師たちを総動員して仕上げた作品だったという興味ある仮説を提起しているほどである<sup>(28)</sup>。だがそれにもかかわらず、グレチンのノヴゴロドでの主要な仕事はやはりイコンの製作だったにちがいない。ヴズドルノフが言うように、ノヴゴロドやキエフやウラジミルなどの石造教会はロシア全体の木造教会に比べたら文字通り「大海のなかの一滴<sup>(29)</sup>」であったし、ノヴゴロドのように例外的に多くの石造教会が建立されたところにおいてさえ絶対数からいえば木造教会の方が遥かに多かったのである。しかも都市全体がいわば「木製」だったために、度重なる火事によって木造教会は再三焼失し、頻繁な再建が行われなければならなかった。ちなみに12世紀の最後の30年間をとってみると、この間にノヴゴロドで建設された教会の半数以上が再建や建て直しなのである<sup>(30)</sup>。おそらくグレチンもこうした多くの木造教会から沢山のイコンの注文を受けていたにちがいない。

グレチンの時代にイコンや壁画の注文を多くさせたと思われる事情がもう1つある。彼が

(23) Г.И.Вздорнов, Живопись, в кн.: Очерки руссуой культуры 13-15 вв., ч.2, М., 1969, стр.319.

(24) Там же.

(25) Н.Г.Порфиридов, Древний Новгород, М.-Л., стр.249-289.

(26) НПЛ, стр.39, 42, 44, 230, 238.

(27) Грозишчеに近いネレジットツェに建立（1198年）された教会で12世紀の壁画が沢山かつ非常によく保存された教会として有名であったが、第二次大戦中ドイツ軍によって破壊された。破壊前のこの教会と壁画については次のものを参照。А.Строков, В.Богусевич, Новгород Великий, Л., 1939, стр.50-58.

(28) Б.А.Колчин и др., Усадьба, стр.156-166.

(29) Г.И.Вздорнов, указ.соч., стр.319.

(30) N. Dejevsky, The Churches of Novgorod: The Overall Pattern. *California Slavic Studies*, XII, p. 222.

ノヴゴロドで仕事を始めた12世紀の後半はすでにこの世紀の前半に始まった共和政の変革が一層すすみ、それが教会のあり方にまで大きな変化をもたらしていた。12世紀初めまではノヴゴロドの教会を支え且つ教会の支持をあてにしていた主要な政治勢力は侯であったが、12世紀後半には教会と結びつきこれを支える社会階層は著しく一般化する<sup>(31)</sup>。そのことは教会建設の担い手の変化や、建設される教会の形態そのものゝ変化となって端的にあらわれる。12世紀初めまでの教会建設者はもっぱら侯と侯に支えられる主教であったが、この世紀後半の教会建設では在地の貴族、商人、商人ギルド、区や街区などの地域共同体が主要な担い手となる。大主教の教会建設も増加するが、この時代の大主教は貴族層との「連携」を強めすでに侯の影響下から脱していた<sup>(32)</sup>。教会の「大衆化」は当然建設される建物の形態にも反映する。建築史家のカルゲルは書いている。「こうしてノヴゴロドでは12世紀後半に新しい型の教会が出現し始めた。前代の教会は豪華だが数が少ないのにたいし、新しい教会はずっと小さく、簡素で、ずっと気のおけないものだが、その数は遥かに多かったのである<sup>(33)</sup>」デジェフスキーがノヴゴロド年代記の記録にある教会建設の数を計算したところによると、12世紀第一三半期の建設数は9件、第二三半期が12件、第三三半期が34件である<sup>(34)</sup>。このような教会の担い手と規模と数の変化は、また教会の建てられる場所と教会の機能の変化を伴う。かつて「市場」「クレムリ」「ゴロジシチュ」など都市の公的機能や権力機関との結びつきの深い場を中心に建設されていた教会が、次第に区や街区など人々の日常生活の場にも建設されるようになる。14世紀まで教会の数はますます増え、ますます人々の日常的・社会的生活をとりえていくようになる。グレチンはノヴゴロドの教会がこのような変化を開始した時代に居あわせたのであるから、彼が高名を博した名匠だったとしても、彼にイコンを注文するのは主に貴族、商人、ギルド、区、街区などが資金をだして建立する「小さくて、簡素で、気のおけない」沢山の教会だったことになる。

### III

しかしながらグレチンが作ったのは教会用の大型イコンだけではない。いやむしろ、数の上からいえば家庭用や個人用のイコンの方が多かったかもしれない。屋敷の東北の角の建物が彼の仕事場だったらしく、この付近に集中してさまざまな色の天然顔料だとか、人工顔料の原料になる金属や鉱物だとか<sup>(35)</sup>、顔料を加工するのに使ういろんな形の器だとか<sup>(36)</sup>、イコンに被せる装飾用金属板やその加工用具だとか<sup>(37)</sup>、ワニス の材料になる沢山の琥珀だとか、およそイコン製作に関係するあらゆる用具、原材料、半製品などが数十品目にわたって発見された。そのうちの1品目に、実は合計17枚の家庭用小型イコンの板が含まれている<sup>(38)</sup>。

(31) А.С.Хорошев, Указ.соч., стр.32; Н.Г.Порфиридов, Указ.соч., стр.256-257.

(32) А.С.Хорошев, Указ.соч., стр.40.

(33) M. Karger, *Novgorod the Great. M., Progress, p. 22.*

(34) N. Dejevsky, *op. cit.*, p. 221-223.

大きいものでも巾15センチ高さ20センチ程度のもので、平均的には巾8センチ高さ10センチぐらいの寸法が多い。板の厚さは6-17ミリと巾があるが1センチ前後が標準的である。形は四角形と上部が半円形をしたものとの2種類だが、中央部で縦に二分された折りたたみ式のアイコンも2, 3含まれる<sup>(39)</sup>。材質は松またはもみ<sup>(40)</sup>。聖像を描く表の面は木板の周囲に一定巾の枠を残して中央部は2-3ミリ彫りくぼませてある<sup>(41)</sup>。板のなかにはまだ荒削りのままのものも、よく磨かれて滑らかなものもある。表面に赤の塗料だけが少し残っている板も数枚ある<sup>(42)</sup>。明らかにそれは描きかけの半製品アイコンである。後代の例ではアイコン絵師が板の加工について自ら手をそめることはなく専門の木地師に委ねているが、12世紀のこの段階でどうであったかは明らかでない。むろんグレチンの屋敷には何人かの弟子たちが同居していたであろうから、そうした者に分担させていたかも知れない。いずれにせよ形も寸法もみな異なるこの17枚の小型アイコン板は、グレチンが家庭用や個人用のアイコンの注文にも応じていたことの動かしがたい証拠となるだろう。

彼はこれらの板にどんな聖像を描いたのだろうか。1982年に発見された1枚のアイコン板の裏側には、表に描くはずの聖者 Фалей の名が生格形(Фалея)で、白樺文書を記すのと同じ鉄筆状の筆具により刻んであった。Фалейとは Фалалей の口語的な形である<sup>(43)</sup>。また白樺文書の中の1通(№ 553)には、明らかにアイコンの構図を表現したと思われるものがある。壁画やアイコンによく用いられるキリストの略符号 IC XC<sup>(44)</sup> が文書の中央

(35) 天然鉱物による顔料としては雄黄(レモン=オレンジ色, ザカフカースないしギリシャ産), 鶏冠石(赤=オレンジ色, ザカフカース, バルカン産), 藍鉄鉱(青色, ロシア産), 海緑石(緑色, ウクライナ産), 赤鉄鉱(赤色, ウクライナ, ウラル産), 褐鉄鉱(淡黄色)などが出土した。グレチンの工房で作られていた人工顔料の原料としては鉛板(酢酸を注いで鉛板の表面にできる鉛白を取る), 銅板(酢酸を加え緑色の塩を作る), 水銀と硫黄(両者を密閉した容器の中で加熱して硫化水銀=朱砂を作る)などがある。その他アイコンに使われる蜜蝋, ワニス, セラチン, 箔用の金と銀なども発見されている。B.A. Колчин и др., Усадьба, стр.122-128.

(36) 鉱物顔料の保存, すりつぶし, 溶解などに用いる種々の碗, 鉢, 皿, 朱砂を作るためのつば, 琥珀を加熱するための鍋, 顔料加熱用のつば, こんろ, 炉など。B.A. Колчин и др., Усадьба, стр.120-122.

(37) アイコンを被う打出し装飾の金属板(いわゆるバスマ)には聖者の姿以外の部分を被う「オクラド」と、聖者の手と顔を除いた他は全て被う「リザ」の二種類があるが、グレチンの工房からはその両方と打出し加工用の様々な道具類も出土した。Там же, стр.129-135.

(38) Там же, стр.116-120.

(39) 二枚折りのアイコンを「Два Чета» диптих 三枚折りを「Три Чета» триптих という。

(40) アイコン板は菩提樹が理想的とされたがノヴゴロドやアスコフでは松ともみが一般的であった。グレチンの工房で出土したアイコン板は8割が松材である。木村浩『ロシアの美的世界』(新潮選書) p.76 参照。

(41) この彫り下げた部分を「コフチュグ」といい時代により深さに差があると言われているが、ここで出土した小型アイコンでは2-5ミリのばらつきがある。このコフチュグに糊を塗って上に麻布を貼りさらに石膏と獣脂を混ぜた地塗り(レフカス)の層を施す。この上にはじめて朱で輪郭をかき次いでテンペラで彩色し、乾燥したあとワニス(オリファ)の上塗りで画面を保護する。アイコン製作の技法の簡単な解説はクルト・ブラッシュ『アイコン』(三彩社) p.69-70を参照。

(42) コフチュグに直接彩色されていて石膏による下塗り(レフカス)が施されていない。

(43) Словарь русских личных имен, М., 1960, стр.213.

(44) アイコンや壁画の題辞に用いられる略符号(ギリシャ語及びスラヴ語)の主なものには浜田靖子『アイコンの世界』の巻末(XIII)に一覧表として載せられているので参照されたい。



に表示され、その両側に2人ずつ4人の聖者名が日本語のように上から下に、ちょうど4人がキリストを真中に横一列に並んで立っているような恰好で記されている。イエスの左右にグリゴリとフェオドシ、そのさらに外側にアンナとザハリが立っている図である<sup>(45)</sup>。14世紀のノヴゴロドで盛んに作られるイコンの構図に数人の聖者が横一列に前向きに並立しているものがあるが<sup>(46)</sup>、12世紀末のグレチンもすでにこの図柄を描いていたことになる。注文主は自分や自分の親族の守護聖人をこんな風にならべたかったのだろう。さらに1982年の発掘で新たにみつかった白樺文書の1枚には、4枚のイコンと6人の人名が次のような形で示されていた。「〔1枚目には〕ドミトリイ、フリスチナ、2枚目にはイヴァン、マリア、3枚目にはイヴァン、4枚目にはセミョン」(№602. 1196—1209年)<sup>(47)</sup>。人名はみな生格形、《誰誰の》形で示されている。すべての状況から判断して、これは絵師が注文を受けた4枚のイコンとそこに描くべき聖人たちの名を記したものと見る以外にない。いずれも注文主の守護聖者をテーマにした家庭用イコンだったと思われるが、ドミトリイとフリスチナ、イヴァンとマリアといった男女一對のイコンは夫婦のものだろうか。この白樺文書№602の発見は、グレチンの屋敷で出土した一連の文書の解釈に重要な示唆を与える。

1973—75年段階の発掘でグレチンの屋敷の1172—1209年の地層から合計29枚の白樺文書が発見されたが、そのうち17枚はもっぱらロシア人の洗礼名(聖者名)を羅列するだけの内容でそれまでには知られていないタイプの記録だった<sup>(48)</sup>。名はすべて主格形か生格形で記されていた。17枚に記された人名は男女あわせて106名、複数の文書に繰り返し言及される名もあるので人名の種類では56種である。男女別では男子名35種、女子名が21種かぞえられる<sup>(49)</sup>。1枚の文書に13人も名が連ねられているものもあれば、1名の名しか読みとれない断片もある。同一文書中で同じ名が2～3回くり返されることもある。いくつもの文書に合計4～5回ないしそれ以上言及される名もあれば(ゲオルギイ、プロコピイ、イヴァン、ソフィア、アナスタシア、マリア、フリスチナ等)、1回だけしかでてこないものもある(パンテレイモン、イリヤ、キリル、フォマ、マリアンナ、フォクラ他)。だがいったいこの人名を列記した白樺のメモは何だったのだろうか。

発掘を担当した研究者たちが1981年に出した本の中で示した解釈によれば、それは教会の司祭がある特定の日に「健康」と「冥福」を祈るべき教区民たちの名前であり、司祭が法要すべき信徒たちの名(生者と死者を含む)をその日付とともにメモしたものである<sup>(50)</sup>。その根拠は17枚中の1枚に見出された人名以外の短い1句である。「ヨシフ、オヌウフリ、この者らにお恵みあれ(МИЛОСТИВИ НА СИА)、ソフィア、フェオドシア、ウリアナ、ペラゲア、

(45) Б.А.Колчин и др., Усадьба, стр.145.

(46) В.Н.Лазарев, Указ.соч., стр.23-24, таблица 26, 27, 28.

(47) АО 1982 г., М., 1984, стр.38.

(48) Б.А.Колчин и др., Усадьба, стр.43-52.

(49) Там же, стр.55-56, таблица 2.

(50) Там же, стр.48.

ドミトリイ、パウロ、エウドキア、エウフィミア、ゲオルギイ、ミロピア」(№ 508. 1196—1209年)<sup>(51)</sup>。教会暦によると文書の冒頭の2人ヨソフとオヌウフリの祭日は同じ1月4日であり、司祭は2人の聖者に「以下の者らにお恵みを」と呼びかけることで1月4日の日付とこの日に法要すべき10人の信徒名をメモしたのだとするのである。また著者たちは同一文書に主格形と生格形の人名が並存している場合には、主格の名は教会暦による聖人名(つまり日付)を表わし、生格の名は法要すべき信徒の名を示すという規則性を読みとろうと努める。だがこの解釈が成功しているとは思えない。ほとんどの文書または主格(まれに生格)形の人名を列挙するだけで、「日付」(聖者名)と「信徒名」とを区別すべき何ものをも含んではいないからである。№ 508の文書にしても「この者らにお恵みあれ」の呼びかけが冒頭の2人にむけられているとは限らない。むしろ聖職者でもある絵師がこれから描くべきイコンの聖者名をメモしながら、「神よこれら聖者のイコンに慈悲をたれ給え」と挿入句をはさんだのではないのか。似たようなケースは№ 542にもある。「マヌイラ、クリミヤタ、〔アーメン〕、アンナ、ソフィア、アナスタシア」(1196—1209年)<sup>(52)</sup>。このようにすべて主格で並べられた5つの人名の中間に「アーメン」(амини)の祈りをはさんでいる。この祈りの言葉が挿入されることで前後の人名の持つ意味が異っていたとはとても思えない。だがさらに重要なことは、これらの人名を列記した白樺文書の一部が明らかにイコンと結びついている事実である。キリストを挟んで4人の人名を縦書きにした№ 553がイコンの「構図」を表現していたことは前述した通りで、この点は先の書物も著者たちも認めているのである<sup>(53)</sup>。しかもこの文書と同じように人名を縦書きにして横一列に並べる書き方は№ 522にもみられるし、№ 553の裏側に記された人名表では横書きと縦書きが混在している<sup>(54)</sup>。このようにイコンの「構図」として示された人名と横書きの人名とは連続的につながっているのであって、それをつなげている糸は明らかにイコンである。少なくとも№ 553と№ 522のように内容・形態ともよく似た文書の一方をイコンに結びつけ、他方を司祭の法要メモとするのはいかにも理屈にあわない。№ 553の「構図」中4人の名が同時にイコンに描くべき聖人のメモでもあったように、ただ羅列されているだけにみえる人名表も画家の頭の中で順序づけられた1枚1枚のイコンに描かれた聖者の列だったのである。そのことを決定的にしたのが1982年に発掘された前述の№ 602である。この文書が一連の人名文書の1つであることは明らかであるが、ここでは6人の人名が4つの「何か」に割り振られている。「何か」はイコンであり、従って人名はイコンに描かれるべき聖人たちの名である。

グレチンの屋敷で発掘された数十枚の人名表は、おそらく彼の工房に注文されたイコンに描くべき聖人の一覧表であり、注文を間違えないようにするための備忘録であり、また部分的には1枚1枚のイコンにえがく聖像の種類や配置をメモしたものなのである。グレチンの

(51) Новгородские грамоты на бересте, 1962-1976 гг., М., 1978, стр.103-104.

(52) Б.А.Колчин и др., Усадьба, стр.50.

(53) Там же, стр.145.

(54) Там же, стр.48-49, 52.

工房は12世紀末の20年余りの間に、どんなに少なく見積っても最低106人、56種の聖人の姿を大小のイコンにえがいていたことになる。

## IV

「グレチン」がノヴゴロド在住の1絵師に与えられた通称だったことは明らかになったが、彼がその渾名の通りビザンツからの帰化人だったのか、たんにギリシャ系住民の子孫だったのかは定かでない。ただ若干の状況証拠からみて本当のギリシャ人だった可能性は強い。1196—1209年の地層から集中的に出土した例の「人名」白樺文書では、12世紀のロシア語の記録にはほとんど見ることもない連字（2つの字母の結合）が再三使われている。例えば

РІ (PとИ) ТІ (TとИ) НІ (HとИ) НН (ИとН) МР (MとP) ТР (TとP) といった具合である<sup>(55)</sup>。ヤニンはこのグレチンの「ギリシャ人的な特徴<sup>(56)</sup>」の1つだとみている。だとすると一連の人名文書はグレチン自身の自筆の記録だということにもなる。この人名文書に混ってキリル文字で書かれたギリシャ語の「人名」も1枚だけ出土した。《 МЕРКУРИО ТО СТРАТИЛАТИ 》(№ 552. 1196—1209年)<sup>(57)</sup>。「戦士メルクリオス」は特にスモレンスクで人気の高かった聖者であるが<sup>(58)</sup>、これもグレチンへのイコンの注文だったにちがいない。12世紀末から13世紀初頭にかけてスモレンスク侯ロスチスラフ<sup>(59)</sup>の子孫が次々とノヴゴロドの侯位についているから、このイコンはその筋からの注文だったかも知れない。1人の聖人名を記しただけのこの短い記録の中で先の連字は3回も使われている。ビザンツとの交流の深かった当時のノヴゴロドにギリシャ語で聖者名が書ける「ロシア人」が居ても少しも不思議はないものの、その人物の名が「グレチン」であってみればやはり彼がギリシャ人だったらしいとの印象は深くなる。もう1つの状況証拠は、地中海地方からオリーブ油やブドウ酒を運搬する容器として使われたアンフォラの破片が沢山グレチンの屋敷で発見されたことである。合計18個分のアンフォラの破片で、ノヴゴロド全体で今までに出土したアンフォラの数の2割に相当する。1つの屋敷の1世代の地層からの出土としては例外的に多い。グレチンのところで出たアンフォラの型は2種類あって、1つはクリミアのケルソネス型、もう1つは今までの研究では知られていない型だがエーゲ海地方のものに焼きが似ているとい

(55) Там же, стр. 48, 52-53.

(56) Там же, стр. 149.

(57) Там же, стр. 147.

(58) スモレンスクの最初の侯はヤロスラフ賢侯の子ヴァチェスラフ(1054-1057)であるが、この侯の洗礼名はカエサレアの戦士メルクリオスに因んだ「メルクリ」である。後に「戦士メルクリ」はスモレンスク市の守護聖人とされ崇拜されるようになる。В.Л.Янин, Актовые печати Древней Руси 10-15 вв., т. I, М., 1970, стр. 16.

(59) ムスチスラフ・ウラジミロヴィチ(ウラジミル・モノマフ侯の息子)の息子ロスチスラフ・ムスチスラヴィチのこと。実質的なスモレンスク侯国の確立者でスモレンスク主教に与えた有名な1150年の“行政状”の発行者である。息子のスヴァトスラフ、ムスチスラフ、ダヴィド、ロマンなどが次々にノヴゴロド侯として招かれ、孫の代にもひきつがれている。

う<sup>(60)</sup>。アイコンの上に塗るワニス(オリファ)は煮立った油に琥珀を溶かし込んで作っていたから、グレチンの工房ではワニス作りに使った小さな琥珀の粒が大量に出土したし、油と琥珀を加熱するための銅鍋も発見された<sup>(61)</sup>。グレチンはアンフォラで運ばれる地中海のオリーブ油とバルト海の琥珀でワニスを作っていたにちがいない。ノヴゴロド地方には良質の植物性乾性油である亜麻仁油が豊かだったから、ワニスにはこの油で充分用が足りたはずであるが……。グレチン工房の沢山のアンフォラに、若い頃ギリシャで修業した絵師のオリーブ油への職人的な「執着」を見るのは少々「読みすぎ」というものだろうか。いずれにせよ、このアンフォラがグレチンを地中海や黒海に結びつける1つの証拠になることは確かであろう。

ノヴゴロドの年代記に「絵師」の名が記されている例は、共和政都市国家の全時代を通じて3人しかいない。最初がわれらの「グレチン・ペトロヴィチ」(1296年)、2人目は「イサイヤ・グレチン」(1338年)<sup>(62)</sup>、そして3人目がかの有名な「フェオファン・グレク」(1378年)<sup>(63)</sup>である。奇しくも3人が3人とも「ギリシャ人」(グレチン又はグレク)の名で呼ばれており、中世ノヴゴロドの絵画に占めるビザンツの地位や影響力を暗示している。さらに絵師の名が年代記に記されることはごく稀な例外だった点からみて、この3人はそれぞれの時代のノヴゴロドで高い評価を得ていた名匠だったにちがいない。周知のようにノヴゴロドは15世紀までロシアを代表するアイコン製作の中心地だった。その最初の高揚期が12-13世紀、美術史上のピークは14世紀末-15世紀末に訪れる<sup>(64)</sup>。そしてノヴゴロド・アイコンの最盛期を切り開いたのが、14世紀70年代に大主教の招きでノヴゴロドにやってきたギリシャ人テオファネス(フェオファン)だったのである。彼はコンスタンチノーブルで修業し、ガラタ、カルケドン、クリミアのタナなどを遍歴して製作に従事したあと、ノヴゴロドに来て20年ほど滞在し、さらに90年代にモスクワに移って1410年頃にロシアの地で死んでいる。だがフェオファンは中世ロシアで活躍した絵師のうち、その作品について確定でき、またその経歴や生涯について多少とも知ることのできる最初の人物なのである<sup>(65)</sup>。フェオファン以前の絵師について具体的なことはほとんど判らない。グレチンがギリシャ人だったとしても、クリミアのギリシャ人だったのかコンスタンチノーブルからやって来たのか等々は今後も謎のまま残るだろう。

(60) Б.А.Колчин и др., Усадьба, стр.86-90

(61) Там же, стр.122, 128.

(62) НПЛ, стр.348. 「同年大主教ヴァシリイは5月4日聖なる殉教者セリヴァンの日に、我らが主イエスキリストのエルサレム入城教会の壁画を描くようイサイヤ・グレチンその他の者に命じ、同じ日に描き始められた」

(63) フェオファン・グレクについてはモスクワ系年代記に何度か言及されるが、ノヴゴロドでは第四年代記の1378年の項に商業地区スラヴェンスキー区イリイナ街の救世主変容教会の壁画を描いたことが記録されているだけである。フェオファン・グレクについての研究は多い。概略については前掲浜田靖子『アイコンの世界』p.140-143を参照。

(64) В.Н.Лазарев, Указ.соч., стр.5.

(65) フェオファンの経歴については1415年にトロイツキー修道院の僧エピファネイがトヴェリのスパソ=アフアナシー修道院の院長キリルにあてて書いた手紙の中に記されており、それによると彼はコンスタンチノーブル、ガラタ、カルケドン、タナ、ノヴゴロド、モスクワ、ニジニノヴゴロドと遍歴する間に約40カ所の教会壁画を描いたという。Г.И.Вздорнов, Указ.соч., стр.285-286.

しかし絵師グレチンがノヴゴロドに定着したのが12世紀の80年代、フェオファンの約200年前であったことは尼僧通りの発掘で明らかとなった。年代記は1186年にビザンツ皇帝マヌエル・コムネノスの親族でアレクシオス・コムネノスなる人物がノヴゴロドを訪問していることを伝えているから、ひょっとするとこの時にグレチンもやってきたのかも知れない<sup>(66)</sup>。グレチンもフェオファンもまずノヴゴロドにやってきた点で共通している。だが遍歴の絵師フェオファンと違ってグレチンはこの地に永住し、ノヴゴロド社会の中に地位を得る。ここで絵師としての活動を始めて約10年後の1193年、冒頭で触れたように彼は大主教候補者として年代記に登場する。この年1186年以来大主教だったグリゴリイが死んで、人々は侯、修道院長、聖ソフィアの人々、司祭たちとも相談して後任の選定に入る。ところが「ある人々はミトロファンを立てようとし、別のもはマントウリイ、さらに他のものはグレチンを望んだ。人々の間に大きな争いが生じたので《聖ソフィアの宝座の上に3つのくじを置こう》という声があがった。こうして直ちにくじを置き、聖なる勤行を命じ、そのあと民会から1人の盲人を送った。そしてその者は神の恩寵によりマントウリイのくじを引いた<sup>(67)</sup>」というわけである。1156年以来ノヴゴロドは在地の聖職者から自分たちの主教を選出する権利を入手し、1165年には初めて白僧出身者を主教の座につかせ、同時にノヴゴロド主教座を「大主教座」として公認させることに成功した<sup>(68)</sup>。1193年の選任は民会が主教を選挙するようになってから4回目、「大主教」になってから3回目、そして民会が候補者をめぐって対立し《くじ》で大主教を選んだ最初の例なのである。グレチンは定住してから10年ほどの間に、ノヴゴロド人自身からその主教職に推されるほどの社会的信頼を獲得していたことになる。主教に推されている以上彼が僧職にあったことは明らかである。だとするとグレチンが10年ほどの間にノヴゴロド聖界に築いたこのような地位は、専ら彼の絵師としての名声に依るのか、それとも聖職者としてのもっと別の能力や政治的要素などに由来するのだろうか。その辺の事情を知るでては何もない。ただ絵師としての活動分野の外で、グレチンが社会的「有力者」の顔をちらっとのぞかせる白樺文書が1通だけある。ミロスラフなる人物がグレチンに送った手紙である。内容は近く予定される裁判に関する判事側の内部的な打合わせで、グレチンはミロスラフから次回公判での役割を指示されている<sup>(69)</sup>。当時の司法権は侯および

(66) НПЛ, стр.38, 228. 年代記はビザンツ皇帝マヌエル・コムネノス(1143-1180年)の息子の同じく皇帝アレクシオス・コムネノス(1180-1183年)がノヴゴロドに来たと記しているが、これはむろん誤りでマヌエルの甥の子供にあたる人物である。

(67) НПЛ, стр.231-232.

(68) アルカージの後任として大主教に選出されたのはイリヤであるが、彼は聖ヴラシイ教会の司祭にすぎなかった。1163年に民会で選ばれ1165年に叙任された。また同時にこの時からキエフ府主教がノヴゴロド主教を「大主教」の位階として公認し、ノヴゴロドの主教がコンスタンチノーブル総主教と直接の関係を結ぶ可能性を与えたのである。А.С.Хорошев, Указ.соч., стр.36.

(69) № 502 (1196-1209年)「ミロスラフよりオリセイ・グレチンへ。ガヴコ・ポロチャニンが入廷したら、[被告が]どこに住んでいたかを質問してくれ給え。私がイワンを捕えて人々の前で審問した時に起きたことは君も見た通りだ。彼はどう答えるだろうか」Новгородские грамоты на бересте, 1962-1976 гг., стр. 96-99.

市長など選挙で選ばれた共和政執行権力との共同裁判によって維持されており、市を代表する判事は市長をはじめ少数の聖俗界上層に限られていた。ヤニンの推定では、ミロ斯拉フは当時の市長だった「ミロシカ・ネズディニッチ」本人だという<sup>(70)</sup>。だとすればグレチンがノヴゴロドの重要な社会的政治的機能を担う有力者でもあったことは、年代記だけでなく尼僧通りの発掘物からも確認できたことになる。遍歴のギリシャ人絵師としてではなく、ノヴゴロドの聖界に名望ある聖職者兼絵師としてこの社会にとけ込み、市民から親しみを込めて「グレチン」と渾名された帰化人の姿をそこに認めることができるであろう。

## V

グレチンが80年代に住みついた屋敷の5つの建物(これは12世紀50年代に建てられた)は、彼が大主教になり損った翌年1194年の火事で全焼してしまう。だが焼跡にはすぐに土が盛られ整備されて以前とはやや違う5つの木造家屋が建設される。新しい家にも工房ができ絵師の仕事は継続されている。ところがさらに15年後、1209年の大火で再び全焼すると今度は数年間新しい家は建てられず、やっと再建された以前よりはかなり貧弱な家にはもはや絵師グレチンの生活の跡はまったく認められない<sup>(71)</sup>。仮に1180年に25才でノヴゴロドに来たとすれば彼はすでに54才である。グレチンはどこにいったのだろうか。フェオファンのように他の都市に移ったとは思えない。この時代のロシアにノヴゴロドほど政治的にも経済的にも活発かつ自由で、絵師としての仕事に豊かな機会を提供する都市はほかになかったであろうし、ノヴゴロド社会の中で築いた地位も容易には棄て難かったはずである。尼僧通りの屋敷地から姿を消して17年後、やはりグレチンは生きていてノヴゴロドの年代記に再び顔を見せる。1226年に病に倒れたユリエフ修道院長サヴァチィは、瀕死の床で「グレチン」を後継者に指名するのである。

死に望んだサヴァチィは「大主教アントニィ、市長イワンコ及びすべてのノヴゴロド人と呼ば、自分の僧団とノヴゴロドの人々に《われらが修道院長を選んでほしい》と頼んだ。人人は《あなたは誰を祝福されますか》と聞いた。彼は《聖コンスタンチン・エレナ教会の司祭グレチンを任命されたい》と言った。そこで人々はその当日3月2日、善良にして強く神を恐れるグレチンを連れて来て剃髪させた。そして3月8日聖フェオフィラトの日に大聖堂にて彼を修道院長に叙任した<sup>(72)</sup>」 尼僧通りを去ったグレチンが得た新しい地位はコンスタンチン・エレナ教会の司祭職だったのである。年代記にこの教会は1151年に建立されたとあるが場所は示されていない。16世紀の土地台帳資料でみると、この名を冠した教会はヤネヴァ通りとロストキナ通りとの2か所に存在した<sup>(73)</sup>。2つの通りは丁度ネレフスキー区とザゴロドスキー区の境目あたりに隣り合わせで平行して走っているから、同名の2教会はごく近い

(70) Там же, стр.99; Б.А.Колчин и др., Усадьба, стр.138.

(71) Б.А.Колчин и др., Усадьба, стр.59-80. 参照.

(72) НПЛ, стр.65, 269-270.

位置にあったことになる。グレチンがどちらの教会の司祭だったのかは判らない。だがいずれにせよ彼が移り住んだのは同じソフィア側の近隣の区であり、クレムリンの南側から北側の街に引越ただけということである。

ロストキナ街又はヤネヴァ街の教区司祭として十数年を過し、かなりの老齢に達していたグレチンにユリエフ修道院の院長という名誉ある地位がめぐってきた。ノヴゴロドではすでに白僧から大主教に選出される先例が確立していたが、在俗司祭が最大の修道院の院長職に就く可能性さえ開かれていたことになる。しかし白僧が修道僧になって剃髪すれば洗礼名とは別の僧名に名を変えねばならない。オリセイ・グレチンは自分を後継者に指名してくれたサヴァチの名に因んだのであろう、サヴァの名を選んだ。彼が修道僧名をサヴァとしたことを示す1226年の資料が1つ残っている。3月2日に剃髪し改名した直後、彼は自分の身に起きた名誉ある出来事を記念したかったのであろう、神をたたえる聖歌集を自分の手で筆写した。その最後に彼は次のように付記した。「罪深き司祭たる私サヴァ、俗名グレチン (Азь попинъ грешный Сава, а мирськы Гръцинъ) がこれらの書を書いた<sup>(74)</sup>」。すでにサヴァを名乗っているが同時にまだ自分を司祭と呼んでいるから、3月2日の剃髪と3月8日の修道院長叙任の短い間にこの写経を行ったことになる。

グレチンの修道僧名がサヴァであったことは年代記からも確認できる。グレチンが修道院長に就任して5年後の1231年、年代記は何らかの理由(多分政治的背景があったと思われるが詳細は不明である)で生じた修道院長の更迭を伝えているが、そこで解任された院長をサヴァの名で呼んでいるからである。グレチンが1226年に就任したあとこの職の交替はなかったのであるから、サヴァがグレチンの修道僧名だったことは疑いを入れない。「この年の冬、ヤロスラフ侯、大主教スピリドン及び全ノヴゴロドはフチンの聖スパス修道院からその修道院長、柔和にして温順なるアルセニィを連れて来て聖ゲオルギィ(ユリエフ)修道院の院長職を与えた。そしてサヴァを解任すると庵室にとじこめた。彼は病気になり6週間床に臥ったあと、3月15日土曜の朝課の前に死んだ。かくて彼は修道院長アルセニィと全僧団とによって葬られた<sup>(75)</sup>」このようにギリシャ人絵師オリセイ・グレチンはノヴゴロドの高位聖職者サヴァとして死んだ。ノヴゴロドの名所として現在も沢山の観光客を集めているユリエフ修道院のどこかにグレチンは眠っているわけである。25才ぐらいでノヴゴロドに来たという前述の仮定に立てば、彼はすでに80才近い高齡に達していたことになるだろう。

ところで、死の2年程前、1229年にグレチンはもう1度だけ年代記に言及される。2度目の大主教候補者への推挙である。1228年の政変で不在になった大主教の選出を新任の侯ミハイルが提起する。「《汝らのもとには大主教がいない。この都市に大主教がいないのはふさわしいことではない。神は〔前大主教〕アントニィを罰せられたのだから、汝らは司祭なり修

(73) В.В.Майков, Писцовая книга по Новгороду Великому конца 16 в., СПб., 1911, стр.114, 117, 118, 127, 130.

(74) Б.А.Колчин и др., Усадьба, стр.149.

(75) НПЛ, стр.70, 278.

道院長なり修道僧なりのうちからふさわしい者を選ぶべし》するとある者たちは侯にこう言った。《聖ゲオルギィ〔ユリエフ〕修道院の輔祭でスピリドンという名の修道僧がおります。この者がふさわしい》と。だが別のものたちはヴォルイニの主教オサフを、さらに別の人々はグレチンを推して《府主教に〔主教の職を〕与えられた者こそが我らの教父である》とした。そこでミハイル侯はこう言った。《神はどの者を我らに与え給うか、3つのくじを置いてみよう》人々は〔3人の〕名を書いて宝座の上に置き、侯の幼い息子ロスチスラフを大主教の官房から送った。神は自らに仕えノヴゴロド及びその全属州の言葉もつ羊たちを司牧する者を選び給い、スピリドンのくじが引かれたのである<sup>(76)</sup>。今回は一介の司祭としてではなく、3年前からのユリエフ修道院長として大主教候補に推薦されたのである。彼の正式の名は今ではサヴァであるはずだが、数十年来ノヴゴロドの人々の間で親しまれてきた通りの良い「グレチン」の名がやはりここでも使われている。3人の候補をたてて対立しているのが民会に集まる在俗の市民たちであってみれば、修道僧としての新しい名などでグレチンを呼ばなかったのは当然であろう。1193年の時と同じようにここでもまた民会は3つの意見に分れた。12世紀後半から区を単位とした市内の地域間対立は次第に鮮明になっていくから、大主教の選出をめぐる民会内の対立も当時有力だった3区間の争いを反映していた可能性は強い<sup>(77)</sup>。とすればグレチンを担いだのはどこの区の有力者だったろうか。ノヴゴロドでの生活の前半を過したリュージン区あるいは大火の後移り住んだネレフスキー区だったろうか。それともその両方を含むソフィア側全体だったろうか。この問題を解くには1231年の事件の背景を含め、12世紀末から13世紀30年代にいたる侯、貴族、庶民間の入り組んだ対立と連合の歴史、それと結びついた諸侯国や府主教座との複雑な「国際」関係にも立ち入った検討が不可欠である。大いに興味あるテーマであるがもはやここで立ち入る余地は残っていない。どうやら「くじ運」には恵まれず、遂には同じ修道院の輔祭にさえ先を起されて死んだ老人グレチンの精々個人的な「不運」に思いをはせながら筆を擱かざるを得ない。

(76) НПЛ, стр.68, 274-275.

(77) 年代記に区名があらわれ始めるのは11世紀(ネレフスキー区1067年)からであるが、12世紀末までにリュージン区、スラヴェンスキー区、プロトニツキー区を加えた4つの区が確認できる。ザゴロドスキー区が言及されるのはずっと遅く14世紀のことである。ヤニンやアレシコフスキーはノヴゴロドの成立時には後にリュージン、ネレフスキー、スラヴェンスキーの三区になる三つの独立した小集落だけだったという仮説を提起しているが、事実ノヴゴロドの独立時代を通じてこの三つの区が常に最も政治的に有力で相互に権力を争った。



&lt;&lt; RÉSUMÉ &gt;&gt;

## A GREEK ICON-PAINTER IN NOVGOROD

Eizoh MATSUKI

The archeologists working in Novgorod had the fortune to obtain a new type of written materials in 1951 when the first birch-bark documents were found by excavation. Since then the number of this type of documents has increased, as they have been excavated mainly from various city dwellers' homesteads ("usad'by") of the 11th-15th centuries, together with many other objects for their daily use. Some of the documents, especially letters addressed to city dwellers, happened to reveal that the homesteads from which the documents were excavated belonged to certain families or persons who are well known by other written sources like chronicles, deeds and so on.

From 1973 to 1977 the archeologists unearthed an icon-painter's homestead consisting of several wooden houses and an atelier on the "Chernitsina street" in "Liudin konets", one of the medieval five districts of the town. This icon-painter was identified with the Greek immigrant who was called "Grechin" in Novgorod and was referred to as a higher cleric or an icon-painter in the First Novgorod Chronicle several times. The excavation witnessed that he continued to live there from eighties of the 12th century to the first decade of the 13th century. It also brought to light a few birch-bark letters ordering some icons from him, many lists of the icons which he was ordered to paint, quite a number of small icon-boards for domestic use, all sorts of mineral paints and raw materials for artificial pigments, various instruments with which to make paints from materials and many other objects which were used for icon-painting. These finds made clear some aspects of the earlier icon-painting history, not only social but also technical ones which had been unknown up to the time.

A few other birch-bark documents also tell us about Grechin's higher social status in Novgorod. From the chronicles it is known that he was twice nominated for the Novgorod episcopacy: first in 1193 when he lived on Chernitsina street, and then in 1229 while he was the priest at SS. Konstantin and Herena church in Nerevsky konets. He failed of election both times. Five years before his death, however, Grichin was chosen abbot of the Yriev, the biggest and most important monastery in Novgorod. He died in 1231 and buried in the monastery.

As the materials for the researches on this Greek painter, we probably

ought to add a series of Novgorod icons and frescoes in Byzantine style which date back to the 12th and 13th centuries and are attributed a Greek master by specialists in iconographic history. We have, after all, four different kinds of materials: the birch-bark documents, the archeological data, the Chronicles and the Novgorod icons and frescoes. Combined analysis of these materials has revealed the life of an medieval icon-painter before “Feofan Grek”, who was once considered as the earliest master whose career and artistic activities we can know to a certain degree.